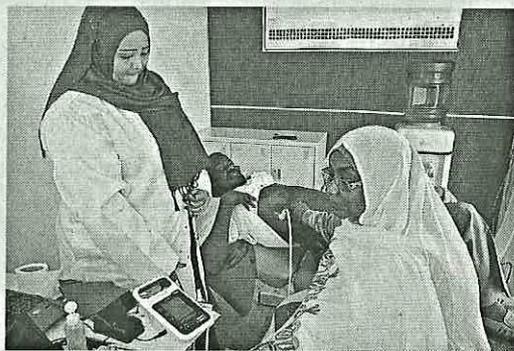


途上国で移動診療車

ソフト開発のアクシオヘリックス



一部、沖縄企業の診断機器を採用した

「ドクターカー」は、三菱ふそうの小型トラック「キャンター」をベースに、心電図や超音波エコーなどの診断機器や医療システムを搭載した。アクシオヘリックスはネット上でデータを共有するクラウド技術などに強みを持つ。ネットを使えば遠隔地からでも医療情報を管理できることから、診療車を企画した。一部の診断機器などに

ネット経由で医師助言

ソフトウェア開発のアクシオヘリックス(那覇市、シバスタラン・スハルナン社長)は、独自開発した移動診療車を本格販売する。日本の医師らの助言も受けられる遠隔診療システムを備えたのが特徴。まずスーダンで9月以降に本格的に販売するほか、今後は検診設備などの医療インフラが整っていないアフリカなど発展途上国向け市場の開拓を狙う。

は地元ベンチャーのレキオ・パワー・テクノロジ(那覇市、河村哲社長)など6社の機器を採用するなどして低価格化した。価格は1台700万円程度と、既に発売されている競合車両に比べ2〜3割程度割安だという。まず8月中旬、政府開

発援助(ODA)を使った国際協力機構(JICA)助成事業でスーダンに7台を先行導入した。アクシオヘリックスによると、スーダンには「ヘルスセンター」という簡易的な診療所が存在するものの、大半のセンターには血圧計やマリアアの検査キットなど簡易的な設備しかないという。スーダンには100台程度の需要があるとみており、月10台の受注を目指す。同社は昨年9月、JICAと業務委託契約を締結した。スーダンでは現地の事務所を通じて医療機関などを対象に現地で営業を進めるほか、政府系機関やNPO団体、国際機関にも売り込む。すでに民間の医院から受注を受けているほか、他のアフリカ諸国の引き合いもある(スハルナン社長)としている。

同国を手始めに、今後はほかのアフリカ諸国のほか、途上国で移動診療車の販売を拡大していきたい考えだ。

同社は医療分野のシステム開発会社で、年間売上高は約3億円。診療車の事業本格化により、年10億円程度に引き上げたい考えだ。